新版

血液と私

足立和子

足立和子著

新版・血液と私

解毒と血液浄化による 健康への道

新版・血液と私

1990年8月10日　第1版
著　者　足立和子
発行者　星田宏司
発行所　株式会社いなほ書房
〒169　東京都新宿区高田馬場1-16-11
電話　03（209）7692
発売元　株式会社星雲社
〒112　東京都文京区小石川5-19-25
電話　03（947）1021
印刷　中和印刷株式会社

乱丁・落丁本はお取り替えします。

ISBN4-7952-6247-0

本書はすべて、著者自身による、
実録手記です。

表紙デザイン・アイフルブレーン
乾　昌彦
表紙水彩画・足立和子
本文カット・杉本　征

まえがき

〈川底の小石が輝いて見える小川の流れの中を、風のざわめきでこぼれた紅葉が小舟になって、季節を運ぶ〉

〈夕涼みにうちわを使いながら、月に住んでモチつきをしていると言ううさぎの姿を想像しながら、ひとときが幻想のなかで過ぎて行った〉

そんな昔をひたすら懐かしみ、化学へ向かって驀進する現代に、

「ちょっとひと休みしましょうよ」と声をかけたくなっているのは、私だけでしょうか？

《血液の病気》の垣根を乗り越えて再び元気になった私は、考えるところあって、今度は逆に、深く病気の経過をふり返ってみました。

人間の歴史の途中で、突然二人三脚の形で溶け込んだ化学薬品に対して、私は今、体験を通して、その道の専門家とは違った目を持つようになりました。

自らの体験は同病の人達とのかけ橋となり、時の流れの中で私なりの結論が出た時、そ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

こには予知し得なかった発見も待っていたのです。

〈何ゆえにか血液が減少する〉

ただひたすらそこから逃れたいと思っていた願いは、自然へのUターンによって叶えられました。

私の友人が知人が、その好転に目を見張りました。

似たような血液の病気の人達が、わらをもすがる思いで同じことをやってみました。

特殊疾病のはずであった病いは短い期間で、しかも同じような経過を経て好転に向かうことが分かりました。

まさに、新しいそして驚くべき発見でした。

医療以外のもので病気が治ることを認めなかった薬事法も、食品で効果があるものを機能性食品と呼ぶようになり、化学万能の考え方は揺らぎ始めました。

健康回復の方法は何でもいい、誰も皆、ただひたすら生きたいのです。生きたいという願いを、誰も止めることは出来ません。

特殊疾病（現代医学では治りにくい病気）は、薬害によって引き起こされている場合が多いことも、一般の人達がすでに認識し始めています。

〈軽い風邪や痛みのために気軽に飲んだ化学薬品で、不治の病いに取りつかれてしまう〉

あるいは、

〈医療の専門家が原因不明と言っている病気の中には、化学薬品が原因と思われるものも少なくない〉

このような考え方も、徐々に広がっています。

〈膿疱性乾癬〉という新しい皮膚炎が発見され、特殊疾病に加えられて、皮膚炎も慢性化する傾向をみせ始めています。

生物の歴史の途中で、人間が仲間に加えた化学合成物は、良しにつけ悪しきにつけて、人と深い関わりを持つようになりました。

化学万能の考え方に拍手を送っている人達には、大勢に逆らう者として、私の発言などは耳ざわりであるかも知れません。

しかしながら、治りにくい病気が、原因不明・確たる治療法がないとされている以上、その渦に巻き込まれないための知識を身につけることも必要です。

耳ざわりと言わず、体験で綴る血液の話、どうぞお聞き下さい。

足立和子

目　次

第一章　原因不明の心臓発作を抱えて

出張中の不正出血……2
病院での点滴……11
バス停前で行き倒れる……14
左手先がしびれる……20
脊椎の矯正を受けたが……24
意識不明で倒れる……31
胸が苦しい……35
精密検査では異常なし……37
血液検査への疑問……42

つるの死……48
魔の九月……52
原因不明という宿題……56

第二章　体を悪くした原因と結果を探る

医学書を読む……60
体に異常が出始めたキッカケ……67
異常の原因を結論づける……71
亡き母の薬草の常備薬……75
食べ物と私……82
血小板が増えるおいもの粉末……85
難病の原因が化学薬品だったことを伝えたい！……94

第三章　解毒と血液強化の健康法

いもの粉と草の汁（ヘルスロードの健康法）……100
人体を支える三大栄養素……104
脳下垂体の大切な役割……109
毛は血の余りもの……117
体液について……120
サルの奇形の原因……123
農薬は安全なの？……129
無農薬の日本茶のすすめ……138

第四章　医療とヘルスロード健康法の違い

医療とヘルスロード健康法の違い……144
命と健康は自分で決めるもの……152

解毒の働き……160
増え続ける《特殊疾病》……163

第五章　食物と薬物と病気の因果関係

おいもの自然科学……172
人間が生み出す科（化）学……175
花粉症が昔なかったのは何故？……178
白血病と抗ガン剤……184
抗生物質の出現と功罪……194
危険な風邪薬……198
三カ月の命と宣告された短大生……204
元気になった短大生からの手紙……211
健康法を試す前に……214
あとがき……219

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

第一章

原因不明の心臓発作を抱えて

■出張中の不正出血

昭和五十一年三月。

その時私は、大阪発東京行きの最終の新幹線の中にいました。

日曜日のこんな時間に、しかも二泊三日の出張を終えての帰りだと知ったら、私の主治医は目をむいて怒るに違いありません。

輸血と点滴、そして最悪のあの時は酸素吸入も加わって命拾いをした経験を持つ私は、半年後の今も、命綱とも頼むあの医師の元に通い、時には点滴を打ってもらいながら増血剤を飲んでいるのです。

働くことについては、もちろん許可は出ていません。

病気の再発は怖い、されど働かなければ母子家庭の私達母子三人、食べていけません。

仕事を終えて、上司のあとについて上がりながら、大阪駅の階段で、体調の変化を感じ始めていました。

体調が逆戻りする時は、決まって脈が乱れるからです。そして気がつくと、やたらと深呼吸をしているのです。

予感は当たってしまいました。こうして座席にいる今、何やら血液が下腹部の方へ向かっているのを、鋭くなった神経が教えてくれています。

真ん中の席に座っていた私は、通路側の上司に「ちょっとごめんなさい」と言ってトイレに立ちました。

本の書き出しに、実に恥ずかしいけれど、真実を書かなければなりません。トイレに入るのを待っていたかのように、ポタポタとうすい血液の不正出血が始まりました。

席に戻ってからも、止まる気配はありません。私は不安を押しころすように、じっと宙を見つめていました。

「どうしたの！」

どうしてこの上司はいつもこのように、きつい言い方をするのでしょう。

その表情は、私のトイレが長かったことで何かを感じとって、「またなの？」と言っているようです。

入院していたあの時も、会社の中でただ一人見舞いに来てくれたこの人は、

「あなたがこんな弱い体だとは思わなかったわ。あなたがこんなことになっているために、私が専務に気を遣っているんだから。入社の時、血液の病気にかかっているなんて言わなかったじゃないの！」と、見舞いに来てくれたのか叱りに来たのか分からないけれど、言いたいだけ言って帰って行きました。

私が考案した《パッティング美容法》の採用が決定したのは、この人の口ききによるものですから、この人がこのような言い方をするのも無理からぬところではあるのですが……。

私は出血が止まってくれることをただひたすら祈りましたが、じっとしていた上体をそっと浮かせてみた時、ダーッとまとまった血液の移動を感じて、恥も外聞も捨てました。

「高田さん、お願いがあるの。私の家まで一緒に行って下さい。不正出血が始まって、とても怖くて一人では帰れそうもありません。お疲れは充分承知しています。お願いです」

「何言ってんのよ！　日曜日に働いたから明日休みという訳じゃないのよ。出張の報告もしなければならないし、甘えるんじゃないの！　一人で帰んなさい」

もううんざりと言いたげな上司は、くるりと向こう向きになると、目をつぶってしまいました。

胸をしめつけられるような不安の中でしばらくの後、私はまたしても、足を組んでいる上司に言いにくいことを言わなければならなくなりました。トイレに行かなければなりません。

「ごめんなさい。トイレに行かせて下さい」と言うと、目をつぶったまま足を引いてくれました。

病気知らずのこの人は、病気のつらさを知りません。

確かな病名も知らされないまま、命綱の先生を頼りに生きている私の胸の内など、理解しようとする様子など見えません。

この人は、私が比較的元気にしていて言いつけを守っていれば、ニコニコしていていい人なのです。

そしてこの私は去年の入院以来、血液に対して特に神経質になっています。

最終の新幹線が少し遅れて東京駅に着くと、不安でいっぱいの私を残して、上司はさっさと改札口を出て行ってしまいました。

体中の血液が流れ出てしまうのではないかという恐怖でいっぱいの私は、ゆっくり階段を下り、そして地下道を一番線のホームに向かってゆっくりと歩き、そして用心深く、ま

た階段を上りました。新宿駅に下りても、いつもの通勤電車はとっくに出てしまっていることでしょう。

私は中央線で国分寺駅まで行き、そこから電話をかけておいてタクシーに乗り、増血剤をもらっている病院で、止血剤を打ってもらうつもりでした。

「しっかりしなければ、子供達が待っている」と自分に言い聞かせ、一分でも一秒でも早く電車が走ってくれることを祈るばかりでした。

国分寺駅に着くと、先を競ってタクシー乗り場に並ぶ人の波を横目に、私は公衆電話のボックスに向かいました。

電話のベルが四回程鳴ると、応答がありました。〈助かった!〉

「もしもし、私そちらでお薬を戴いている足立です。こんな夜中に申し訳ありませんが、不正出血が始まって困っています。止血剤を打って戴きたいのですが……」

「院長は今、オーストラリアに視察中です。私は当直の看護婦ですが、先生の指示がなければ勝手なことはできません」

「このままではとても怖くて家には帰れません。そちらに行きたいのですが……」

「来て頂いても、先生の指示がなければ私だけでは……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c